

巻頭言

2010年5月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

グローバル化時代の学習

茗溪塾塾長 宇野 雅春

ゴールデンウィークが終わり、平常が動き出しています。ここから夏にかけて、また忙しい日常が戻ってきます。社会の動きもとりわけ慌ただしい時期にはいますが、受験勉強にとっても大切な積み上げの時期です。生活のリズムを作るための計画づくりが大切かもしれません。

5月5日の子供の日、子供の全人口に占める割合は13パーセント台となり過去最低ということ。今後も世界規模での大きな変化が続くことはまず間違いないことのように思えます。特に企業を中心に推し進めているグローバル化という大きな流れには注意が必要です。教育に大きな変化をもたらせていく可能性があります。グローバル化とは何かというと、日本の企業が他の国に日本企業を拡大していくというよりは、現地にその国の人を使って企業を立ち上げていくということです。今までは、その国の言葉をしゃべれる日本人が重宝がられていましたが、現在は、その国の優秀な人材を直接雇用する方向に企業が動いています。またそういう方向の企業が、現状の不況を打開し、突破して行くとも見られています。今までは、外国人を採用する場合に、日本人と同等の日本語が必要という固定観念がありましたが、それがもう崩れてきているということです。いまだに、外国人の採用に日本語の力を重んじる傾向は根強くありますが、この流れは急速に変わることは間違いありません。日本の市場が衰退し、アジアに市場が移っていくなかで、必要なのはその国での意思疎通といわれるようになってきています。日本語はそこそこでも、その国の言語が自由に操れる人材の方が貴重ということなのです。空前の就職難といわれていますが、この傾向は単に不況から来るものではないと思われます。企業も本当に必要な人材ということに問題意識が向いているのです。サバイバルの時代に、自分の生活条件だけを準備していこうという就職観では、どんな仕事でも採用を躊躇せざるを得ないということです。茗溪塾の会社説明会にも常に60人前後の学生がきます。自分たちの進路を決めかね模索している様子がわかります。塾に魅力があるということより、とりあえず色々見ておこうということなのだと思えます。例えば、今から8年前なら、「ユニクロ」への就職はとても冒険のように思われていましたし、当時の学生の親なら「メーカー」や人気企業があるのに何で「ユニクロ」に行くのかと反対したと思います。あっという間に世界のトップ企業に成長することを誰も予想していなかったからです。だからと言って、将来性を予測しうまくその勢いに便乗しようという学生のあり方も、おそらくまちがっています。将来性は自分が作るという積極性が実は企業から問われ始めているからです。おそらくそういう気概を持っている、役に立つ人しか採用しないという時代に突入したということなのです。グローバル化により優秀な人材は世界規模の争奪戦に入っています。高い教養と専門性、そして高い語学力、それに加えてコミュニケーションの力、求められている次元はどんどん高くなっていくように思われます。この厳しい世界競争は、それゆえに必ず「教育」の質の問題として論議されていくと思われます。韓国も中国もインドもフィリピンも勉強する優秀な学生をたくさん輩出してきています。日本にもたくさんの留学生がいますが、躍進する国ほど、こうしたアジアの優秀な人材を確保しようと、留学生の勧誘を積極的に行っているようです。夏に向けてすべての合同特訓で「目的を持ってはじめる」を提起しました。それには「10年後の自分」を考えさせるというテーマを組みこんでいます。

グローバル化の時代だからこそ、早い時期からの目的意識が必要となります。そして目標達成のための「習慣作り」が重要になるのだと思えます。目標のない生活が、ゲームや目先の面白さだけにおぼれる子供を作ります。夏に向けて、今の時代に対応できる力づくりを更に深めていければと考えています。